

英語の指示詞 *this* と *that* に対応する日本語の指示表現

皆 島 博 *

英語教室

(平成10年 9 月 24日受理)

A Contrastive Study of Deixis in English and Japanese

Hiroshi MINASHIMA

Department of English

Abstract: In this paper, we will pick up English demonstratives; *this* and *that* from a novel written in English and compare them with equivalent expressions in the Japanese translation. The purpose of the paper is then to investigate the characteristics found in deictic expressions in English and Japanese, considering the viewpoint of translating English into Japanese.

Key Words: English, Japanese, demonstrative, deixis, contrastive study, translation

1. はじめに

本論では、英語の小説の日本語訳版から*this*と*that*に対応する日本語訳を抽出し、日英語の指示表現を比較・対照する。そして、英語から日本語への翻訳という観点をも考慮に入れつつ、日英語の指示詞の持つダイクシスとしての特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 英語と日本語の指示詞

2.1. 英語の*this*と*that*

英語の指示詞*this* (these)及び*that* (those)には、基本的に限定詞(determiner)と指示代名詞(demonstrative pronoun)としての二つの用法がある(Swan 1995:593)。

* 福井大学教育学部；福井医科大学非常勤講師

(1) a. *this* child/*that* house

b. *These* looks like Mrs. Walker./Put *those* down - they're dirty.

これらの*this*と*that*は、限定詞として用いられる場合も、指示代名詞として用いられる場合も、意味論的な使い分けの基準は変わるところがない。すなわち、*this*(*those*)は話し手に比較的近接している場合に用いられ、これに対して*that*(*those*)は比較的遠離している場合に用いられる(Greenbaum & Quirk 1995:216)。

(2) a. We shall compare *this* picture here with *that* picture over there.

b. We shall compare *these* here with *those* over there.

英語の*this*と*that*の対立に関しては、‘near/distance’ (Quirk 1972:217, Quirk *et al.* 1985:372), ‘near/not so near’ (Leech & Svartvik 1975:59, Leech 1989:115), ‘proximal/non-proximal’(Huddleston 1984:296), ‘close to the speaker/distant from the speaker’ (Swan 1995:594) のように、用語は様々ではあるけれども、何らかの点で「話し手からの遠近」といった概念によって説明しようとしている欧米の文法学者による文法書は少なくない⁽¹⁾。ただし、ここで重要なのはあくまで「話し手中心」ということで、「聞き手」はあまり考慮されていないという点である。

2.2. 日本語の指示詞

日本語のコノ(コレ)、アノ(アレ)、ソノ(ソレ)にも、英語と同じように、限定詞と指示代名詞としての二つの用法がある。ただし、指示詞と指示代名詞とでは形式が異なり、英語が2項体系であるのに対して、日本語は3項体系である⁽²⁾。

(3) a. コノ本/コレ取って下さい

b. アノ山/アレ見て下さい

c. ソノ話/ソレ知ってますか？

日本語の指示詞の研究は、佐久間鼎に始まると言われ、日本語の指示詞を「こそあ（ど）」と呼ぶのも佐久間にちなむものである。佐久間(1951:22-23)では、次のような説明がなされている。

(4) …「これ」という場合の物や事は、発言者・話手の自分の手のとどく範囲、いわばその勢力圏内にあるもののなです。また、「それ」は、話し相手の手の届く範囲、自由に取れる区

域内のものをさすのです。こうした勢力圏外にあるものが、すべて「あれ」に属します。

以下、佐久間(1951)以降の日本語の指示詞に関する研究をいくつか概観する。

まず、阪田(1971)では、話し手を中心として、その領域の中にあるものと外にあるものに分けた上で、話し手の領域内のもの、すなわち空間的・心理的に身近なものをコ系で指示し、話し手の領域外のものをソ系で指示すると規定している。さらに、話し手が聞き手も自分の領域内に包み込んで、その領域内のものをコ系で指示し、領域外のものをソ系かア系で指示すると規定している。

次に、安藤(1986)は、佐久間(1951)に基づいて、thisと「コ系」は話し手の縄張りに関わり、thatと「ソ系」は聞き手の縄張りに関わり、thatと「ア系」は両者の縄張りの外に関わるかと仮定している。

また、小泉(1988:9)によれば、近称「コレ」は話し手の領域内にある物を指し、中称「ソレ」は聞き手の領域内にある物を指し、遠称「アレ」は伝達の関与者の領域外にある物を指す。

最後に、神尾(1990:161)は、「情報なわ張り」⁽⁴⁾という概念で日本語の指示詞「コ・ソ・ア」の分析を行っている。情報のなわ張り理論によれば、「コ」は話し手のなわ張りに関わり、「ソ」は聞き手のなわ張りに関わり、「ア」は両者のなわ張り外に関わる。

以上の諸先行研究は、「領域」「縄張り」と用語の使用に違いは見られるものの、基本的には、佐久間の「勢力圏」という考え方を踏襲している点で一致している。つまり、何らかの意味で、話し手の内側(近く)にあるか、外側(遠く)にあるかという基準である。

2.3. 外界指示と文脈指示

ここで、後の議論のために、英語と日本語の両者の指示詞に共通する機能、すなわちダイクシス(deixis)について規定しておきたい。英語の指示詞this, that及び日本語の指示詞「コ・ソ・ア」は、一般に直示語(deictic words)と呼ばれる。直示語は談話の場面を直接的に指示するが、それらの外延は話し手との関係においてはじめて決定される(安藤 1986:212-213)。

(5) a. 外界指示(exophora): 直示語が場面を指示する場合⁽⁴⁾

b. 文脈指示(endophora): 直示語がテキストを指示する場合

3. 英語のthisとthatに対応する日本語の表現

英語のthisとthatにどのような日本語の表現が対応するのか、おおよその目安を得るために、『ジーニアス英和辞典』(小西他・編, 1992年)のthisとthatの項目の記述を引用してみよう。

- (6) a. this: この, これ, こちら, 今, 今日の, 現在の, つぎに述べること
b. that: あの, あれ, その, それ

これを見ると, thisは日本語の「コ」にほぼ対応し, thatは「ソ」もしくは「ア」にほぼ対応するように見える。実際, 日英語指示詞の対照研究においては, 次のような図式によって日英語指示詞の対応をとらえるのが標準的であるようである(服部 1968, 小島 1988, 石綿・高田 1990)。

- (7) a. this: コレ, コノ
b. that: アレ, アノ/ソレ, ソノ

しかしながら, 筆者がデータベースにした英語小説とその日本語訳版との比較では, 指示詞に関しては, 次のような対応関係が見られた。

(8)	コ	ソ	ア	合計
this	35(81.4%)	6(13.0%)	2(4.7%)	43(100%)
that	5(6.3%)	55(69.6%)	19(24.1%)	79(100%)
$\chi^2 = 70.8$, d.f.=2, $p < 0.01$				

少なくとも上記のデータに基づく限り, thisに「コ」が対応する例が最も多いことは英和辞典の記述を裏付けする。ただし, thatに関しては「ア」もしくは「ソ」が対応するという点では辞書の記述通りだが, 細部についてみればthatに対応する「ソ」は, thatに対応する「ア」の3倍近く多いのが興味深い点である。

3.1. thisに対応する「コ」

指示詞の用法は, 「外界指示」と「文脈指示」とに分けて論じられることが多いので, 以下, this/thatと「コ・ソ・ア」の対応に関して, それぞれ「外界指示」と「文脈指示」との2つの側面から対応関係を見ていくことにする。

3.1.1. 「外界指示」の場合

服部(1968), 神尾(1990)によれば, thisと「コ」は, 何らかの点において, 話し手からの距離が近い, もしくは話し手のなわ張りの中にある場合に用いられる。

上で述べたように, this対「コ」は「規則的な対応」を示す。実際, 本論のデータベースとして選んだ *Twilight Zone* (以後, TZと略)とその日本語版『トワイライトゾーン』(以後,

トと略)とを比較対照してみると「外界指示」の用法では、thisと「コ」はよく対応している。次の例は、話し手が眼前の事物を直接指示している場合である。

- (9) a. “*This* is Helen,” he said.(TZ,133)

「こちらはヘレンだよ」(ト,156)

- b. *This* is a good cartoon.(TZ,143)

こいつはいい漫画だ(ト,170)

- c. Working in a retirement home like *this*, you see so many people come and go-(TZ,166)

このような老人施設で働いていますと、ほら、大勢の方々がやってきて、やがて去って…(ト,68)

- d. “*This* is the men’s dormitory,” Miss Cox announced.(TZ,169)

「ここが殿方のお部屋です」ミス・コックスが言った。(ト,71)

話し手が眼前の事物を心理的に（意識の中で）指示する場合でも、thisと「コ」はよく対応している。

- (10)a. What the hell was happening to *this* country anyway? (TZ,11)

一体全体、この国はどうなってるんだ？(ト,8)

- b. Was *this* their idea of good food?(TZ,144)

これが、この人たちの考えるごちそうなのだろうか？(ト,172)

話し手が眼前の出来事を指示する場合でも、thisと「コ」はよく対応している。

- (11)a. What’s the idea? Why are you doing *this* to me?(TZ,31)

どういうことなんだ？ なぜこんなことをする？(ト,38)

- b. “I won’t let you do *this* to me,” he murmured.(TZ,54)

「こんなことをさせてたまるか」と、うめいた。(ト,62)

- c. “You can’t go on like *this* forever,” said Mr. Weinstein.(TZ,200)

「いつまでもこんなふうにやっていけるものではないんだ」ワインスタイン氏が言った。(ト,117)

同じく、話し手が眼前の出来事を心理的に（意識の中で）指示する場合でも、thisと「コ」はよく対応している。

- (12)a. Couldn't the family understand what they were doing to the child by indulging him *this* way?(TZ,146)

この子をこんなふうに甘やかしておいて、いったい自分たちが彼に何をしているのか、この家族には理解できないのだろうか？(ト,175)

- b. *This* was a new beginning; they must learn together, learn how to control Anthony's power, using it only to serve its proper purpose.(TZ,160)

これは新たな始まりなのだ。わたしたちはいっしょに学ばねばならない、アンソニーの超能力の制御の仕方を学び、正しい目的だけに役立てねばならないのだ。(ト,195-196)

- c. But I'm not ready to go back. I want to stay like *this*!(TZ,201)

だって、わたしはまだもとへ戻るつもりはないんだ。このままでいたいんだ！(ト,118)

物語や小説の場合、話し手としての作者が、あたかも作者の眼前に存在するかのように事物を指示する場合がある。この場合でも、*this*と「コ」はよく対応している。

- (13)a. The signs were in French, but *these* men were German.(TZ,22)

看板はフランス語だが、この男たちはドイツ人だ。(ト,22)

- b. Helen had private reservations about the wisdom of obeying such a command; her past experience with roadside cafes in godforsaken rural are as like *this* had not been all that pleasant.(TZ,118)

ヘレンはこうした命令に従うことをこれまで敬遠してきた。過去の経験からして、このような人里はなれた片田舎の食堂は、あまり心地よいものではなかった。(ト,136)

- c. But *this* prosaically furnished parlor was not a stage set and the small boy standing before her wasn't a magician.(TZ,155)

しかしありきたりの調度品が置かれたこの居間には、舞台装置がほどこしてあるわけでもなく、また、彼女の前に立っている小柄な少年が、奇術師であるわけでもなかった。(ト,188)

同じく、話し手としての作者が、あたかも作者の眼前に存在するかのように出来事を指示する場合がある。この場合でも、*this*と「コ」はよく対応している。

- (14)a. The boy didn't reply. Inserting another quarter, he resumed his play, *this* time without a pounding accompaniment.(TZ,122)

少年は返事をしなかった。新たに二十五セント硬貨を入れ、今度は機械を叩かずにプレーを再開した。(ト,141)

- b. *This* wasn't the first time she had seen someone disappear before her very eyes; she'd watched magic acts on the stage, where the conjurer waved his wand and a shapely assistant had seemingly vanished from behind a black cloth or the confines of a closed cabinet.(TZ,154-155)

目の前で誰かが消えるのを見たのは、これがはじめてではなかった。舞台の上で奇術師が杖を振ると、美しい身体をした女性の助手が、黒い布の背後から、あるいは密閉した箱から消えていく奇術を見たことはあった。(ト,155)

- c. He always watched the news before going to bed and he dammed if he'd miss it now just because of *this* nonsense tonight.(TZ,187)

彼は寝る前いつもニュースを見た。今夜のこのようなばかげたことのためにそいつを見るのがすなどということは、断じてなかった。(ト,100)

3.1.2. 「文脈指示」の場合

文脈指示における this と「コ」の対応例は、本論のデータベースではあまり多く見られなかったが、この場合でも、this と「コ」はよく対応していると思われる。

- (15)a. "You think *this* is funny?" (TZ,17)

「こいつがそんなにおかしいか？」(ト,17)

- b. The full ache in his limbs returned and now he greeted it gratefully; at *this* gave him part of the answer.(TZ,44-45)

手足の鈍感がぶりかえしてきたが、今の彼はそれを歓びたい気分だった。すくなくとも、これが答えの一部を成してくれる。(ト,51-52)

- c. Let's think *this* over.(TZ,198)

このことをもう一度考えてみましょう。(ト,114)

3.2. that に対応する「ア」

服部(1968)、神尾(1990)によれば、that と「ア」は、何らかの点において、話し手からの距離が遠い、もしくは話し手(聞き手)のなわ張りの外にある場合に用いられる。これらに対して、久野(1973)は幾分観点が異なり、「ア」はその代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられると説明している。

3.2.1. 「外界指示」の場合

上述の *this* 対「コ」と同様に, *that* 対「ア」は「規則的な対応」を示す。「外界指示」の用法では, *that* と「ア」はよく対応している。次の例は, 話し手が遠方にある事物(場所, 時代も含む)を直接指示する場合である。

- (16)a. Judging by the kind of clothes he wears and *that* old car of his, you're probably in better financial shape than he is. (TZ, 18)

やつが着ているものや, あの古ぼけた車を見てみる, あんたのほうが経済状態はよさそうだよ (ト, 18)

- b. To hell with *that* noise! I got twenty bucks riding on this game! (TZ, 122)

あの音, なんとかなんねえのかよ! おれは, この試合に二十ドル賭けてるんだ! (ト, 141)

- c. "*That's* Sarah," he said. "She's my other sister." (TZ, 137)

「あれはセーラだよ。もうひとりの姉なんだ」 (ト, 162)

- d. "Every Saturday, Leo carries *that* suitcase out to his kid's car every Saturday he carries it back again and unpacks." (TZ, 176)

「毎土曜日レオはあのスーツケースを抱えて息子の車のところまで出かけてゆき, 毎土曜日それをまた持ち帰って中身をあけるってわけですよ」 (ト, 80)

話し手が, 過去の, もしくは直前の出来事, すなわち, コトを直接指示する場合でも, *that* と「ア」はよく対応している。

- (17)a. "I thought we won *that* war but now those same gooks own my house!" (TZ, 18)

「あの戦争には勝ったと思っていたよ。ところが今, おれの家の家主はおんなじ黄色いやつらだ!」 (ト, 17-18)

- b. What in the world was *that*? (TZ, 137)

いったいなんだったの, あれ? (ト, 162)

- c. "I didn't want to do *that*! Honest I didn't - I just got mad, and sometimes I can't help what happens!" (TZ, 151)

「あんなことはしたくなかったんだ! ほんとうだよ…頭がどうかしてただけさ。それにときどき, 変なことが勝手に起きてしまうんだ」 (ト, 183)

話し手としての作者が, 描写されている場面に居合わせて, その遠方に事物が存在するかのよう指示する場合でも, *that* と「ア」はよく対応している。

- (18) It was a miracle, that's what it was - a goddam miracle. *That* rooftop was at least three stories above the cobblestones of the alleyway.(TZ,30)

奇跡だ、まさに奇跡だ…信じがたいほどの奇跡だ。あの屋根から下の砂利道まで、どうみても三階分の高さはあった。(ト,32)

英語のthatは、ダイクシスの用法とは別のレベルで、副詞的な用法において非難・軽蔑の意味や程度のはなはだしさを表すことがあるが、この場合でも、thatと「ア」はよく対応している。

- (19)a. I've sold more units in the last six weeks than *that* kike has moved all year.
(TZ,14-15)

おれはこの六週間で、あのユダ公の一年分以上を売ったんだ(ト,13)

- b. He shouldn't have let himself get carried away like *that* back there in the bar.(TZ,20)

さっきバーで、あんなに頭にきたのがいけないのだ。(ト,20)

- c. First *those* Nazis, next the Klansmen, then the gooks and the G.I.s.(TZ,42)

最初があのナチ、それからクー・クラックス・クラン、その後にヴェトコンとアメリカ兵だ。(ト,47)

3.2.2. 「文脈指示」の場合

文脈指示におけるthatと「ア」の対応例も、本論のデータではあまり多く見られなかったが、この場合でも、thatと「ア」はよく対応していると思われる。

- (20)a. "Good on you," Mr. Weinstein said. "*That's* telling her!" (TZ,178)

「やりましたな」ワインスタイン氏が言った。「ありゃ、効きましたよ！」(ト,83)

- b. "*Those* were the good old days," said Mr. Mute.(TZ,180)

「あのころはいい時代でしたな」とミュート氏。(ト,87)

- c. "*That* was mostly for boys," Mrs. Dempsey said.(TZ,183)

「あれはおもに男の子たちの遊びでしたね。」(ト,91)

3.3. that に対応する「ソ」

英語の指示詞は2項体系で、これに対して、日本語の指示詞は3項体系である。したがって、thatに対応するものとして「ソ」を当てはめるのが普通で、thatと「ソ」とは一応「規則的な対応」を示す。

3.3.1.「外界指示」の場合

神尾(1990)によれば、thatは「話し手のなわ張り外」であり、これに対して、「ソ」は「聞き手のなわ張り」を指すので、両者は意味論的に微妙に異なるが、次のような話し手の比較的近くにある眼前の事物を指示する場合には、thatと「ソ」はよく対応している。

(21)a. “Let’s not do too much of *that* anymore,” she murmured.(TZ,161)

「これからあまりそれを使いすぎないようにしなくてはね」彼女はつぶやいた。

(ト,197)

b. “*That’s* our ladies’ dormitory,” Miss Cox told him.(TZ,167)

「そこはご婦人方の共同寝室です」とミス・コックスが告げた。(ト,69)

c. Is there some kind of magical property in *that* can? (TZ,200)

その缶になにか魔力みたいなものがあるんですか？ (ト,117)

また、黒田(1979)によれば、外界指示において「ソ」は他者の知識を話し手の直接的知識でないものとして把握する場合に用いられる。これに対応するのは次のような例であろう。

(22) “Do you still remember what *those* marbles were called?” Mr.Agee asked.(TZ,183)

「それらのおはじきをどう呼んでいたか、まだおぼえていますか？」エイジー氏がたずねた。(ト,91)

3.3.2.「文脈指示」の場合

本論のデータベースでは、「文脈指示」の用法において対応を示すthatと「ソ」が最も多かった。英語のthatは話し手の勢力外とか、なわ張り外などと説明されることが多いが、この点が、神尾(1990)の「ソ」は「聞き手のなわ張り」という説明との接点である。すなわち、必ずしも話し手の領域に属するとは限らないという点で共通しているのであるが、もちろん話し手の領域に属することもある。

黒田(1979)によれば、「ソ」は「文脈指示」において、概念的知識を話し手の直接的知識でないものとして把握する場合に用いられる。これも、話し手の領域に属するとは限らないという神微の説明に類似している。次の例は、話し手の領域に属する（しかし、聞き手の領域に属するとは限らない）事物を指示する場合における、thatと「ソ」の対応である。

(23)a. The music was a trifle soft for anyone who might be a bit hard of hearing, but Mama didn’t care about *that* either.(TZ,111)

音楽も、やはり耳の遠いひとには、少しばかりその音が低かったが、ママはそのことも気にかけなかった。(ト,127)

- b. Helen nodded. "I do realize it." She paused. "*That's* exactly the reason I'm going." (TZ,114)

ヘレンはうなずいた。「はっきりわかってるわ」彼女は少し間をおいた。「まさにそのために行こうとしているのよ」(ト,131)

- c. But maybe *that* was the correct designation for one of the few places left in the world where one could take refuge in the soothing solace of sleep, undisturbed by the ceaseless clamor of savage sound.(TZ,116)

しかしそれは、人が安らかな眠りの慰安をもとめることができ、絶えることのない野蛮な雑音の喧噪にわずらわされることのない、この世で数少ない場所のひとつということで、正しい名称かも知れなかった。(ト,133)

- d. There you go again, still playing teacher! I thought we were through with all *that*, remember?(TZ,120)

そらまたはじまった。まだあなたって先生気分でいる！わたしたち、そのことはもう終わったと思っていたんだけど、そうじゃない？(ト,138)

また、次の例は、話し手の領域に属さない（属さなかった）事物を指示する場合における、*that*と「ソ」の対応である。

- (24)a. But *that* was in 1940, a lifetime ago. (TZ,22)

だが、それは一九四〇年のこと、大昔の話である。(ト,23)

- b. "Hey! *That's* a great idea! Why didn't we think of *that* ourselves?" (TZ,140)

「やあ、そいつはすばらしい考えだ。なぜわれわれがそいつを思いつかなかったのだろう」(ト,166)

- c. "I never thought of *that*. But you're right, Helen." (TZ,147)

「ぼく、そんなこと一度も思いつかなかった。でも、あなたの言うとおりだよ、ヘレン。」(ト,175)

- d. "*That's* quite a record, Bloom. What's your problem?" (TZ,180)

「そりゃまた大へんな記録ですな。問題はなんだったんですか？」(ト,86)

3.4. this に対応する「ソ」

上述のように、英語の*this*には通常「コ」を対応させるから、*this*対「ソ」は変則的な対応であると言える。

3.4.1. 「外界指示」の場合

次の用例においては、話し手としての作者が、物語の中で描写されている場面に居合わせて、あたかも自分の眼前での出来事であるかのように述べている。

(25)a. And those that remained were - different. Something about their sizes and shapes reminded him vaguely of the old jalopies he'd used when he was a kid; that's what they looked like, but even so he couldn't recognize the models. Behind them, a row of storefronts remained, but even *these* looked strange and unfamiliar.(TZ,19)

だが、残っている車も…違う。車の大きさや型が、なんとなく子供の頃に乘った旧式の自動車に似ているような気がした。たしかにそんなふうに見えるが、車種は見分けがつかなかった。その向こうに店が並んでいるが、それもどこか様子がおかしいし、たまたまいにも見覚えがない。(ト,19)

b. Both the images on the tube and the television itself seemed oddly incongruous in *this* setting.(TZ,132)

ブラウン管に映し出されている画像もテレビそれ自体も、その部屋の道具立てに奇妙に不似合いだった。(ト,155)

c. It was a rabbit - but not the sort that a professional stage magician could conjure up. Only a sorcerer could summon such a thing. *This* was a multicolored monstrosity, a huge misshapen creature with the paws and claws of a tiger.(TZ,150-151)

それは兎だった…しかしそれは、本職の手品師が舞台の上で呼び出せるような代物ではなかった。魔法使いしかそんなものは出現させることはできない。それはいろんな色がまじった化け物、トラの手足をもった巨大な変形動物だった。(ト,182)

これらの場合、英語ではthisが用いられているが、それはthisが話し手の領域に含まれることを指示しているからである。これに対して、日本語の場合、「コ」で対応させるのは不自然であると思われる。

日本語版でも、話し手としての作者が、眼前の出来事であるかのように物語を語っているように訳してある。この点に関しては、話し手が自分の領域に含まれることを指示していると言える。しかし、英語があくまで話し手中心の指示をするのに対して、日本語は聞き手も範疇に入る。日本語の「ソ」に関して、久野(1973)は、話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知ってないだろうと想定した場合に用いられると述べている。

つまり、物語とは、原則的に聞き手にとって未知の情報を話し手としての作者が語っていくものであるから、ダイクシスで話し手のみならず聞き手も考慮する日本語では、上記の例の場合には、thisを「ソ」に対応させるのが自然だということになるのであろう。

3.4.2. 「文脈指示」の場合

英語のthisが話し手の領域に含まれるものを指すことは、文脈指示用法でも同じである。次の例では、文脈の上で近い位置にある名詞を前方照応しているために、英語はthisを用いていると考えられる。

(26)a. No more problems, no more tears; *these* were for the living.(TZ,112)

厄介な問題はもはやない、泣くことももはやない。それらは生きている者たちのものだ。
(ト,128)

b. They wanted youth, but all they would get out of *this* was a broken hip, a stroke, maybe a heart attack.(TZ,189)

連中は若さをほしがっている。しかし彼らがそれから手に入れられるのは、腰の骨を折るとか、卒中あるいは心臓発作ぐらいなものさ。(ト,100)

日本語版では「ソ」が対応しているが、この場合も、上の外界指示と同じ理由で、話し手のみならず聞き手も考慮する日本語では、thisに「ソ」に対応させるのが自然だと説明できるであろう。しかし、次の例は幾分性質が異なる。

(27) “What’s the point of all this talk? Why are you dressing up the past, Bloom ?

This isn’t healthy.” (TZ,183)

「つまりこのおしゃべりの要点は何なんだ？ あんたはなぜ過去を粉飾するんです、ブルーム？ 健全じゃないね、そんなのは」(ト,91)

この例でも、thisの日本語訳の「そんな」は文脈指示用法であるが、「ソ」で対応させている。話し手が、“dressing up the past <過去を粉飾する>” という内容を幾分非難めいて指示している。これは黒田(1979)の「ソ」は概念的知識を自己の直接的意識と対立するものとして把握するものだという説明を部分的に裏付けるものと言えよう。

3.5. this に対応する「ア」

本論のデータベースでは、thisに対応する「ア」の用例は、外界指示用法に関するもの2例しか見つからなかった。遠近という概念にだけ則して言えば、英語のthisは近いものを、日本

語の「ア」は遠いものを指すので、この対応は極めて変則的である。次の例は、物語の主人公が頭の中で考えていることを独白しているところを描写した部分である。

- (28) What the hell was happening to this country anyway? Things were different when he was a kid. You didn't hear all *this* crap about civil rights; those people did their jobs and kept their places. (TZ,11)

一体全体、この国はどうなってるんだ。子供の頃はこうじゃなかった。あの公民権だのという馬鹿げた話など聞いたこともなかった。やつらはやつらに合った仕事をし、分相応にやっていた。(ト,8)

英語版の“You didn't hear all this crap...”のように、英語では独白などで自分自身のことを“You”として2人称的に呼ぶことがある。この場合、話し手が自分の領域に含まれるものとして“all this crap about civil rights”を認識し、自分自身を他者であるかのように“You”として見立てているために、thisで指示しているのだと言えよう。

日本語版では「ア」が対応しているが、この場合、「ア」の指示対象は話し手(= 聞き手)のなわ張り内なので、神尾(1990)の「ア」は話し手/聞き手のなわ張り外という説明とは矛盾する。日本語訳では、英語版の文の形式上の主語である“You”を訳出しているわけではない。したがって、日本語訳は話し手が、自分を2人称で指示するのではなく、1人称で指示しているというように解釈もできる。

しかも、これも日本語訳では明示的に訳出されていないが、英語版に“crap”という語があることから推測されるように、話し手が否定的な気持ちを込めて、“all this crap about civil rights”を指示している。したがって、その話し手の否定的な気持ちが、「あの」という日本語訳に反映されているのではないかと考えられる。

また、次の例は話し手としての作者が、話し手を登場人物と同一化させているかのように、登場人物の心象を描写している部分である。

- (29) It had not been easy for Mr. Weinstein to fall asleep. Usually he went out like a light the moment his head touched the pillow, but tonight was different. So much had happened and there was so much to think about. Of course, *this* fella Bloom was a meshuganah, but it didn't matter. (TZ,190)

ワインスタイン氏にとって眠りにつくことは容易ではなかった。いつもは頭が枕に触れた瞬間、電灯のスイッチを切るように眠りに落ちるのだったが、今夜ばかりは別だった。あまりにも多くのことが起き、考えることがあまりにも多かった。もちろん、あのブルームという男は狂人だったが、それは問題ではなかった。(ト,102)

繰り返し述べてきたが、英語のthisは話し手中心であるので、この例のように、話し手 = “Mr. Weinstein” という状況では、話し手の領域に含まれる “Bloom” をthisで指示するのが自然であると思われる。これに対し、日本語の「ア」は、久野(1973)によれば、その代名詞の指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合に用いられる。この場合、読者すなわち聞き手にも既に「ブルームという男」の知識があると予測されるので、話し手としての作者(=ワインスタイン氏)が、「ブルームという男」を「あの」として指示しているとも考えられる。

3.6. thatに対応する「コ」

上の3.5.と同じように、遠近という概念にだけ則して言えば、英語のthatは遠いものを、日本語の「コ」は近いものを指すので、この対応も極めて変則的である。ただし、近称「コ」に対応するthatがあるという事実を指摘してきた研究は以前からあった⁽⁵⁾。

3.6.1. 「外界指示」の場合

国広(1985)では、英語では、相手の要望や質問に答えるときは指示詞の基準を相手側に移し、自分側のものをthatで指すと説明してある。

(30)a. “Listen to what they’re playing,” she said. “I always liked *that* piece. What did they call it?” (TZ,115-116)

「ねえ、この音楽聴いて。わたし、いつもこの曲が好きだったわ。なんていったかしら？」
(ト,133)

b. “We’re very happy you can eat with us. Anthony’s thoughtful *that* way.”
(TZ, 140)

「いっしょに召しあがっていただけて、とても幸せですことよ。アンソニーって、こんなふうにとってもよく気がつくんです」(ト, 166)

この場合は、話し手が自分側のもの、すなわち眼前の事物や出来事の指示の基準を、聞き手の側へ移動させてthatで指示していると思われるので、原則としてこういう指示基準の移動を行わない日本語訳で「コ」が用いられているのは自然なことであると言える。したがって、上記の例は、国広(1985)の説明を支持するかのように見えるが、「相手の要望や質問に答える」という状況を描写しているわけではない。

竹田(1994)は、国広(1985)の「指示基準の移動」とは別の観点からthatに対応する「コ」の考察を行っているが、話し手の意識の中に定着している既定的な指示対象は、日本語では「コ」で指示するのに対し、英語ではthatで指示すると説明しており、こちらの方がより妥当

な説明であると思われる。

しかしながら、竹田 (1994) の「既定的指示対象」という言い方よりも、むしろ「旧情報 (の指示対象)」という言い方が妥当であると筆者は考える。「既定的」とは、情報構造の観点から言えば、談話における既出の情報すなわち「旧情報」に他ならないからである。すなわち、旧情報は、日本語では、話し手の領域に属する場合「コ」で指示し、英語ではthatで指示する場合があるということである。

3.6.2. 「文脈指示」の場合

話し手の中で既定的な指示対象は、日本語では「コ」で指示するが、英語ではthatで指示するということは、「文脈指示」においても同様である。

- (31)a. He stood quietly, taking deep breaths, forcing in fresh air to clear his lungs and his head. *That* should do the trick. (TZ, 20)

彼はそこに静かに立って、肺と頭に新鮮な空気を送りこもうと、深呼吸をした。これできっと魔法も解けるだろう。(ト, 20)

- b. As for him, all he had was a bad heart - and poor Sadie, complaining about her back pains. Funny; everybody seems to complain about back pains and nobody even mentions front pains. Go figure *that* one out. (TZ, 191)

彼についていえば、悪い心臓と、いつも背筋が痛むとこぼしている、かわいそうなサディーがあるだけだった。おかしいことだ。誰もが背筋が痛むとこぼしているようだが、腹筋の痛みなんてことを言うものは誰もいない。このことをじっくり考えてみよう。(ト, 103)

英語では既定的な事物とは、発話の前の段階で話し手によって同定されている情報のことであろう。すなわち情報としての価値が古い「旧情報」であるために、話し手の領域から離脱したものとして認知され、thatで指示されるのかもしれない。

4. おわりに

本論では、英語の小説とその日本語訳版をデータとして、日英語の指示表現の対応関係を観察してきた。this 対「コ」及び、that 対「ア、ソ」のような「規則的な対応」以外の組み合わせについては、暫定的ではあるが、次のようなことが仮定できるであろう。

- (32)a. this 対「ソ」：指示対象が、話し手(聞き手ではなく)の領域内にある場合
b. this 対「ア」：指示対象が、話し手(と聞き手)の領域内にある場合
c. that 対「コ」：指示対象が、旧情報である場合

しかしながら、これらは英語小説とその日本語訳版との比較・対照という限られたデータベースから得られた結論であり、更なる検討が必要であることは言うまでもない。しかしながら、日英語の指示表現に潜在する特徴の大方の傾向性は示唆できたのではないかと考えている。

【注】

(1)小泉(1988:8)によれば、thisは話し手に近いもの、話し手の領域内にあるもの、thatは話し手から遠いもの、話し手の領域外にあるものを指す。いずれにせよ、欧米の文法家の説に準拠している。

(2)直示の体系は話し手からの空間的隔たりの段階で分類されるが、この空間区分方式は日本語のような三項体系と英語のような二項体系が、世界の言語を通じて最も普及した体系である。ちなみに、バルト・フィン系のリープ語には1項の指示詞しかなく、文脈により、遠近いいずれの対象物をも指示できる(小泉 1988:2-3)。

(3)神尾(1990:21)によれば、「情報のなわ張り」とは、話し手または聞き手としてのXに〈近〉とされる情報の集合を表す。この場合、Xと文情報との間には、〈近〉、〈中〉、〈遠〉の三段階の心理的距離が成り立つ。

(4)「外界指示」の他に「場面指示」という呼称もある(金水・田窪 1992)。また、黒田(1979)などでは「独立的用法」という呼称を用いている。

(5)Levinson(1983)、国広(1985)などで、手に持ったものあるいは手で触っている物を指すのに用いられるthatについて言及されている。

【参考文献】

- 安藤貞雄(1986)『英語の論理・日本語の論理』大修館書店
Greenbaum, S. & Quirk, R.(1990)*A Student's Grammar of the English Language*. London: Longman.(池上嘉彦他・訳『現代英語文法<大学編>』紀伊國屋書店, 1995年)
服部四郎(1968)『英語基礎語彙の研究』三省堂
Huddleston, R.(1984)*Introduction to the Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.

- 石綿敏雄・高田誠(1990)『対照言語学』桜楓社
- 神尾昭雄(1990)『情報のなわばり理論』大修館書店
- 金水敏・田窪行則(1992)『指示詞』(日本語研究資料集・第7巻) ひつじ書房
- 小泉保(1988)「空間と時間における直示の体系」『言語研究』94:1-24.
- 小島義郎(1988)『日本語の意味英語の意味』南雲堂
- 国広哲弥(1985)「マンガの言語学」『言語』14-11, ジュニア版 19:vii.
- 久野璋(1973)『日本文法研究』大修館書店
- 黒田成幸(1979)「(コ)・ソ・アについて」『林栄一教授還暦記念論文集・英語と日本語と』41-59, くろしお出版
- Leech, G. & Svartvik, J.(1975)*A Communicative Grammar of English*. London: Longman.
- Leech, G.(1989)*An A-Z of English Grammar and Usage*. London: Edward Arnold.
- Levinson, S.C.(1983)*Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, R. *et al.*(1972)*A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.
- Quirk, R. *et al.*(1985)*A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 阪田雪子(1971)「指示詞『コ・ソ・ア』の機能について」『東京外国語大学論集』21:125-138.
- 佐久間鼎(1951)『現代日本語の表現と語法』厚生閣
- Swan, M.(1995)*Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- 竹田完二(1994)「話し手の近くにある事物を指す指示詞thatに関する一考察」『筑波応用言語学研究』1:33-48.

【用例出典】

- Block, R.(1983)*Twilight Zone*. New York: Warner Books.
- ロバート・ブロック(安達昭雄訳)(1983)『トワイライトゾーン』角川書店